

## 【特別寄稿Ⅱ】

# 「美しい内分泌学」

慶應義塾大学医学部 腎臓内分泌代謝内科 教授  
日本内分泌学会 代表理事

伊藤 裕

『PAX ENDOCRINOLOGIA : 内分泌至上主義』—内分泌学は、すべての医学の基盤となる学問領域である—わたしのこの信念は、今でも揺るぐことはない。

ホルモンは、個体の発生分化、成長成熟、老化死に至る生命現象、更には集団を形成するヒトの社会性などを生み出す臓器の構造・機能、臓器間ネットワーク、その時間経過のカウンティングに関わる4Dワールド全事象における中心プレーヤーである。しかし、わたしの『内分泌至上主義』は、この事実にもみ拠っているわけではない。ホルモンの本来有する特性、すなわち、対立する二者、あるいは相反する事象において、それらを含有してなお全体を一つの系として継続的に成り立たせようとする所作、すなわち、“恒常性（ホメオスタシス）”をあくまで志向しようとするホルモンの本質的属性に対する深い理解が、内分泌学なる学問の中核にあることから発せられたものである。人口に膾炙する「ホルモンバランス」は、極めて深い事象である。

私たちは、だれでも「幸せ」になりたい。これは、みんな「生きがい」を求めて生きていると言い換えられるかもしれない。私たちはいつも「何か」を希求している。そして、その「何か」は、端的には、脳の報酬系においてドーパミンがうまく作動できるよう刺激する“もの”であろう。私は、この報酬系が真に喜ぶ“もの”は、一言でいうと「美しさ」と言いたい。むしろ、そうであるものを「美しい」と定義できる。それでは、この「美しさ」は何なのか？私は、それは、“想定を超えた”「バランス」だと思う（「幸福寿命—ホルモンと腸内細菌が導く100年人生」伊藤 裕著 朝日新書2018）。

“知的興奮”もその一つである。これは、研究の原動力である。これまで見つけていなかった生命現象を見出した時の驚きが興奮となる。ただ単に、「見つ

かっていなかった」—これまで報告がなかった、ということではなく、想定もしなかった事実との出会いである。我々は、未知の事実に出会いたい。そして、そのために「想像逞しく」仮説を立てる。それは出会いのために必須ではある。しかし頭の中で安易に組み立てたストーリーを、さもそれが真実であるかのように軽々に作り上げることでは、興奮は得られない。その作業の中で、思いもかけなかった事実と出会うことが真の喜びである。先達が残した研究業績を知り尽くし、理路正しく仮説を組み立て(サイエンス)、自分自身の長く苦しい経験をもとに、結果を安易に予想することなく、虚心坦懐、実験に臨む(クラフト)先に、真の「想定外」が待ち受ける。そうして発見された新事実は、それが想定外であっても、決して奇妙奇天烈ではない。生命現象を説明するために、その事実は、新たなピースとして、妙にちゃんと嵌まり込むことになる。その事実には、腑に落ちる、という「バランス」が見て取れる。それこそが「美しさ」である(アート)。この美しさを感じ取れる感性が何よりも大切であり、それを得ることは本当に難しい。弛まぬサイエンスとクラフトの先に初めて実現する。そして、この「美しさ」を感じ取れる感性の醸成において、ホルモンの有するバランス志向性を学ぶ内分泌学は極めて魅力的である。

臨床現場においても然りである。現代社会の課題として、いわゆる VUCA が取り上げられている。すなわち、Volatility 不安定、Uncertainty 不確実、Complexity 複雑、Ambiguity 曖昧がクローズアップされる中で、単なる臨床エビデンス、ガイドラインに拘泥し、安全で、最大公約数的な画一医療を担保するだけでなく、もっと統合的に自由に思考できる医師の柔軟性と創造力が望まれている。そのためには、「論理、理性」とともに、「感性、直感」、踏み込んで言うと「美意識」的なものが要求される。これは、安易に解釈されると、情報データに基づかない、前近代的、非科学的な姿勢と揶揄されがちだが、EBM が熟成されつつある今、標準化、デジタル化できない、もっと高いところを目指す力、すなわち、患者さん個々の状況を鑑みてその生末を見据える能力の開発育成は、現代における真の臨床医学の進歩に必要だと考える。ここにも、「サイエンス、クラフト、そしてアート」：科学性(医学的論理、情報)、技術(臨床技能)、そして、アート(医学感性)の三位一体がある。感性の成熟は、サイエンス、クラフトすべてが体得されていないと達成できない。棋士の羽生善治さんも、鍛錬の末には、いい一手は、「なんとなく」優先的に想起できると述懐している。

この「なんとなく」感、「直観力」、いわゆる「勘」、は、人工知能（AI）社会において極めて重要である。AIには、勘が働かない。なんとなく、というざわざわした胸の疼きはない。過去の億単位のデータの蓄積をもって、そしてさらに人間が判断を下した情報「教師データ」を教え込むことで、漸く人間らしく、将来を、極めて高い確率で予想できるように仕組まれている。AIが跋扈し、その存在感がますます高まる社会の中で生きる私たちにとって、「妙なるホルモンの力」を学べる内分泌学は極めてその存在価値が高いと思う。「内分泌至上主義」である。  
(2018年 第36回内分泌代謝学サマーセミナー講演より)

無断転載禁止 ©公益財団法人山口内分泌疾患研究振興財団